

三 ジャンヌの謁見えっけん

少女ジャンヌは、陛下に拝謁するために、シノンに向けて頻りに馬を早めて居りました。この一行が危険であつたことはそれはくく言語に絶ことばえて居りました。半分以上は敵地を通らなければならぬのに、河の水は氾濫して徒渉かちわたりすることも出来ず、敵の要塞で固められた市街から、何も彼なにかも見通せるやうな橋を渡らなければならな

つたりしました。けれどもジャンヌは、信仰から得た自信で、平氣で敵の展望の中を通りました。また市々まち／＼でいろ／＼な下らぬ質問を受けて、その煩うるせいののに閉口しました。しかしジャンヌは、聞かうとするものには拒こばまず自分の使命を語つて聞かせました。

ジャンヌが知事のボオドリクウルに信ぜられないで、長くそこにとゞめて置かれた月日は、取返しのつかない貴重な日なのでございました。佛蘭西は一日々いちにち／＼とその運命を果敢はかなくされて、危險の雲は虚弱なシャルルをロアアル河の彼方かなたに送らうとしてゐました。

まことにシャルルに取つては、帝王の冠かむりがこの世に唯一無二の寶ではございませんでした。王冠に離れる心苦しさむこと、無辜たみの民の血

を刃やいばの錆さびにする苦痛とは、いづれ劣らぬ犠牲にちがひありませんが、
後者は殊ことに、心弱く慈悲に深いシヤルルの忍べるところでは
ありませんでした。またいつの日かこゝに行幸みゆきし給ふことの保ほし難
いシノンの地を捨てゝ、ロアアルの河水かはみずに落人おちうどらしく船をやる用意
を、この日頃なされて居をるのでございました。

さうした心になつて居られたシヤルルは、はる／＼國を救はうと
て來たジヤンヌが、謁見を願ひ出たことを聞かれても、あまり氣が
お進みでないやうにみえました。

『如何取計いかじとりはからひましてよろしうござりませう、ドムルミ村の少女ジ
ヤンヌといふ者、ヴォクウラアルの知事のもとから送られましてご

ざりまするが。』

『朕ちんに何を望のぞまうとてな！』

『自ら申しますところによれば、陛下を救ふために神より送られた者と、公言こうげんいたして居りまする。』

『おゝ今の世にそのやうな奇蹟があらばな！朕が眉の曇りは曇らぬさきに晴れたであらうが。』

ともかくもジャンヌは王の前に引見いんけんされました。その時シャルルは、少女を試みるために、御自分は數多くの貴族や廷臣の中に交まじつて、王座には一人の貴族を代かはらせて置きました。

羊牧ひつじかひの少女ジャンヌは、臆する色もなく自若じやくとして王の前に出

ました。さうして王座に倚つた貴族にはちらと一瞥を與へたまふ、人々が固唾かたづを呑んだ中に正しくシャルルを見分けて、恭々うやくしくその前まえに跪ひざまづきました。

『陛下！』

シャルルは内心の驚きを隠して、『否！陛下はあそこにこそ渡らせられる。』と王座を指さしました。

『神かけて陛下が佛蘭西の王様にていらせられます。陛下、神を試みようとして遊ばし給ふな！』と、ジャンヌは凜然りんぜんとして答へました。

シャルルはその試こころみの席を立たれながら、猶訊なほねられました。『お前はいつどこで朕を見やつたか？』

『天の神様のみが陛下を見給ふところで、拝謁いたしましてございます。』

ジャンヌは、威儀ゐぎを正ただして王に自分の使命の趣おもむきを奏上いたしました。賤しい羊牧いや ひつじかひであつた昔の素性から、天使のお姿に接して神のみ意こゝろを告げられたことなどを、謙遜な言語ことばで語りつゞけるのでございました。並居なみゐる人達はみな、たとへそれを信じたと否いなとに係かゝはらず、水を打つたやうに各々の沈黙おのゝをまもつた中に、ジャンヌの清い眼は澄んで輝いて居りました。

『いざ、陛下、わたくしに兵を下さいます。すぐに、わたくしをオ
ルレアンにお送り下さいませ。それが神のみ意こゝろでございます。』

さし出た一人の廷臣はジャンヌに申しました。『したがもし、まことに神のみ心であるなら、神はその好ませ給ふ通りに、ひとりでに英軍を退けたらよいではないか？』

『兵卒が戦ひますならば、神は勝利を與へるでございませう。』シャルルは今、半信半疑の人でございました。たやすくこの奇代きだいな少女を信ずるには、あまりに王は續く不運に馴らされて居りました。

王の心を見ぬいたジャンヌは、お傍そば近く進んで何事かを申上げようとなりました。『陛下、お人を遠ざけて下さいませ。陛下が昨夜遊ばされた祈禱おいのりについて、申上げなければなりません。』

『おゝ、朕がひそかに神に祈つたことを言ひ當てようとな？　よし、

その時こそ朕はお前を信ずるであらう！』

『それは三つの祈禱でございました。その第一の祈りは、「朕もし不

義の財を貪り、むさぼり或は父祖より傳へられてまだ償はぬ罪のあるために、

この亂世を來したきたものならば、朕が身一つに神の怒りを注がせられ

て、罪なき民に恵みをたれさせ給へ！」とございました。また次に

は、「もしも朕等が宗族より、國に君たる位を奪ひ、遠祖より傳へら

れたすべてのものを没収させ給ふのが、神のみ意であるならば、平

和なる胸と、友の眞情と、アニエ・ゾレエが愛の、たゞこの三つだ

けは許させ給へ！」と祈られましてございます。そしてまた第三に

は……………」

ジャンヌは首をあげて、凝^{ちいつ}乎と氣遣^{きづか}はしさうに自分を御覽になつてゐるシャルルを見上げました。『陛下、神かけて陛下は佛蘭西の正統で渡らせられまする！』

その言葉こそ、シャルルを勇氣に甦^{よみがへ}らせるために残された、たゞ一つの力でございました。シャルルの顔は急に晴々しく、喜悅^{よろこび}の色が一層王を美しく若々しく見せたやうでありました。

それは、爲^なすことすることが王を不運に導いて行つたばかりでなく、現在生みのおん母である筈^{はず}の後^{あと}までが、あまりといへばあまりな仕打ちをなさるので、『もしや自分は佛蘭西の正統を嗣^つぐ資格の

ないものではなかつたか？』といふ疑ひを抱かせられて、人知れず神に祈禱をされたのでございました。

その證明は、あかしジャンヌが確かに神より送られたものであるといふことを十分に証據しやうこだてました。あゝシャルルの喜びはどんなでございましたでせう？

『おゝ尊い神の恵みよ！神のおん眼めは朕が胸の奥深く秘めた謙遜を見透し給ふたか！』

『その謙遜の徳は、み空の果てまで輝いて、神のみ救ひをうながしたのでございませう』

『こりや少女をとめ、朕は見事に敵を防ぎ得るか？』

『神かけて、この佛蘭西を悉皆陛下の足下にお置きいたしませう！』

『勝つてライムに進むことが出来るか？』

『數限りもない敵をみな討ち伏せて、陛下をそこに御案内申上げませう。あゝそれこそ天なる神のみ告げ、そしてそれがわたくしの使命なのでございます。』

昨日までも、つひ先刻までも、臆病風に吹き荒まれてゐた騎士達きしだちは、自らの勇氣にあふれて、おのくの槍や楯を鳴らすのでございました。その勇氣によつて、人々はもはや救はれたやうに見えました。

『少女よ、朕は御身に味方の指揮を委すであらう！したがどのやう

な劍つるぎを、朕はその聖きよいつとめにとらしたらよいものか!』

『陛下、お氣遣ひ下さいますな。神のみ告げによつて、わたくしの佩はきます劍は定められてゐございます。何卒どうぞお使者をおつかはし下さいませ、サン・カトリン寺の祭壇の下に、古い刀が埋められてございます。その刀の威力によつて、陛下には勝利を得られるでございませう。また紫の色でふち取りました、純白まつしろな旗たいのを整へて下さいませ。それには佛蘭西國せいを支へる天使のみ姿を描き、白百合の花を刺繡ぬひとるのでございます。』

『何も彼なも少女かが言葉に従はうぞ。』

ジャンヌの希望のぞみは採用されました。ドムルミ村の丘の上に、羊の

群れの女王であつた少女は、宣旨を給はつて今日は萬軍の將、黄金の兜は優しい頭に輝き、鎧はその重みをもつて柔かな肌を包むのでございました。サン・カトリン寺に劍を求める使は派せられ、聖旗は見事に調達され、兵士達は近い未來の勝利を語り合ひながら、その武器を磨いて居りました。

國王の厚い信任と、市民の輿望を一身に擔つて、オルレアンの圍を解くべくジャンヌが出發する日は近づきました。

その日もいよく今日と迫つた時、すでに前進した一部の兵隊は、シノンをさしてやつて来る英國の使節に出會ひました。恰もそれを待つてゐたかのやうに、猶宮廷にとゞまつてゐたジャンヌは、『神よ

り遣はされたものでございます。直ぐに御引見遊ばしませ。』と奏上いたしました。

英國の使節は傲慢らしく御前ごぜんに出て、『使者の趣は餘の儀でもござりませぬが、わが總大將には佛蘭西の悲慘な有様を憫あはれませられるあまり、劔を鞘より抜かぬ先、オルレアン城攻撃の以前に、平和の條約を結ばれようとの御厚意でござりまする。』と得々として言上するのでした。

『うむ、してその條約の内容は………。』

ジャンヌはつと進み出ました。

『恐れながら、陛下、その談判は何卒どうぞわたくしにお委せ下さいま

せ。』

『よし、戦か和睦かよいやうにはからはれよ。』

『お前をこゝに送つたは誰か？』と、たれ厳かにジヤンヌは使者に問ひかけました。

『英國方の大將、サルスベリイ伯爵。』

『その言葉は嘘であらうぞ！生あるものはものも言はうが、冷たい死の手に襲はれて口が動かうか。』

『氣違ひぢみたことを聞くものぢやわい！大將には勇氣にみち

く、おぬし達を屠ほふらうために、陣中に指揮して御座られるわ！』

『如何にも、お前が出達の時までには、恙つしなく生きても居られたらう。

けれど、今朝ツウレルの物見ものみから、市まちを眺めて居られた時、征矢そやのやうに飛んで來たオルレアンの流れ弾丸だまに當つて、もろい最後を遂げられたわ！ 疑ひを解きたいなら、何よりも論より証據しやうこ、お前が陣に達し切らぬうちに、一つに樞ひつぎに出逢ふであらうよ！ さあ、してお前の使命は？』

『隠れたものを見ぬく力があるといふなら、それも話さぬ先に悟らねばならぬ筈でせうて！』

『餘計な差し出口は、神の少女に對して僭越せんえつだとは知らぬか？ 今
はもうその使命を知る必要もないとは知らぬたわけめが！ お前は
たゞこの少女の言葉をよく耳にとめて、わが佛蘭西を掻き亂す英吉

利王、並びにその他の大將によつく復命せよ。「お前達が流した血潮のために、天なる神に御申譯おんまうしわけいたせ、天地の道に逆つて奪つた、市々まちまちの鍵を返却せよ。」となあ、「今こそ少女は神の許より送られて、お前達が平和を希ふか、または強いても干戈に訴へようか、二つに一つの返答を聞かうために來れるぞ。」となあ、「マリアのおん子はお前達にこの佛蘭西を與あたへ給はぬぞ、佛蘭西のシャルルは、國中の諸侯に護まもられて、威風堂々巴里パリの都に入らせ給ふであらうぞ。」となあ、よく／＼膽きもに彫りつけて忘らるなよ。さあお歸り、急いで。お前が陣中にかへりつく先に、少女はオルレアンに勝利の旗を翻ひるがへさうぞ！』

神來しんらいの能辯のうべんはジャンヌを捕へて、頬は紅くれなゐに血をさしてゐました。

『さあ、方々、思はぬ時刻をすごしました。あれ、馬の嘶いなきがわたくしをうながして居ります。では陛下、御機嫌うるはしう勝利の知らせをお待ち下さいませ!』

[目次に戻る](#)

【入力者注】（頁行は底本のもの）

59-10 申上げなければなりません。↓申上げなければなりません。

68-8 潜越ひそだとは ↓ 僭越ひそだとは

公開…令和三(2021)年八月十九日
改訂…令和五(2023)年三月七日